

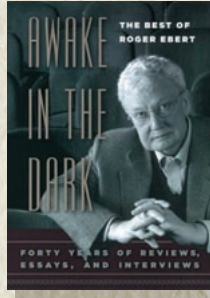
BOOKS

久原正治

九州大学大学院 経済学研究院 教授

時代を映す鏡—— アメリカの映画、日本の映画

映画は時代の鏡である。その背景には時代の経済や経営が映し出される。暗闇に入り日常生活と遮断された中で、覚醒した意識はその背景の中に没入する。多忙なビジネスマンにとり、少し空いた時間をこの異空間に置くことは、気分転換になり、時空を超えてさまざまな思いをめぐらせること



① **Awake in the dark**
The Best of Roger Ebert
Roger Ebert
Chicago University Press
2006

の映画評番組 Two Thumbs Up は米国に駐在した人なら一度は見たとがあると思う。そこで二人が親指を立てた映画は間違いのない名画として観客動員数にも影響力を持っていた。筆者は一九九〇年代後半シカゴ駐在中 Ebert 夫妻と会うことができた。そこでの話題は当時まだマイナーだった日本のホラー映画の話であったが、好奇心旺盛でウイットのある人柄がよく理解できた。

った、その社会的背景についてよく理解することができる。本を読む暇のない人には、彼のホームページが最新の映画評をチェックするのによい。
<http://rogerebert.suntimes.com/>

川本三郎は一九四四年生まれの評論家である。大学卒業後朝日ジャーナルの記者となるが、一九七三年にある政治的事件にかかわり、朝日新聞社を辞職後、隠遁人のような気分で映画や旅の文を書いている。そこでのまな



② **今ひとたびの戦後日本映画**

川本三郎
岩波書店
2007年

ができる。今回はそのような際の道案内にふさわしい日本とアメリカを代表する二人の同世代の映画批評家の本を紹介したい。
Roger Ebert は一九四二年生まれ、大衆紙シカゴ・サン・タイムズで四〇年にわたり映画評を書き続け、全国二〇〇紙以上に配信されるアメリカを代表する映画批評家である。シカゴトリビューン紙の Gene Siskel を相棒に、同氏が先年亡くなるまで続いたテレビ

本書は Ebert の四〇年間の代表的映画批評やエッセー、インタビューをまとめた本である。彼の批評は、その豊富な映画知識を背景にその画面や登場人物について平易な言葉で書きながら、監督や俳優の心理、時代背景などに亘る奥深い内容になっているところにその特徴がある。奥さんが黒人弁護士であることもあり、アメリカの人種や貧困の問題にもさりげなく触れる。映画を見ているときには思いが及ばな

ざしは市井に住む、時代から取り残されたような普通の人々の生活に向けられる。川本の代表作の一つである本書のテーマは、アメリカにあこがれながらそれに反発し、さまざまな現実の経済などの問題に引き裂かれながらもつつましくも日本の伝統を守り、あるいはそれに回帰する人々の再認識である。戦前、戦後を通じて日本の社会は父親をもたない社会であったという。したがって戦後映画の主人公は戦争未亡

成長の中で翻弄された日本人の癒しとなった。川本の本を座右において、ビデオを借りてこのような映画をたまに見ると、日々の多忙な生活の中で我々が忘れたものを思い出させてくれる。
この戦後日本とアメリカが生んだ二人の練達の映画批評家を友として映画を鑑賞すると、それぞれの国の人々の時代背景を映したなりわいが深く理解できる気がする。